福田美蘭 《大江山の酒呑童子退治》 2019年

C'n scene news

VOL. 100

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 100号

［編集・発行］千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan **https://www.ccma-net.jp/**
［発行日］2021年9月17日
［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

ccma_jp @ccma_jp

館長のつれづれコレクション案内

ユーモラスな作品に世相への鋭い視線を込める桂ゆき

桂ゆき (1913.10.10−1991. 2.5)
《やぶれ凧》
1966年 103.0×72.5cm 油彩・コラージュ、合板
千葉市美術館蔵

当館ニュース創刊100号となる今号は、福田美蘭展開催と重なりますので、収蔵品の中から女性美術家、桂ゆきの作品をご紹介したいと思います。桂ゆきは、20代で当時としてはきわめて斬新であったコラージュ作品による個展を開いて注目され、以後、常に新しい表現を試みる美術家であり続けました。父は東京帝国大学冶金学教授、母は大垣藩主一族出身で、ゆきは五女。家屋敷は、明治に歌舞伎界に「団菊時代」の名をとどろかせた市川団十郎と尾上菊五郎が共有していた別荘を買い取ったもので、広大な敷地には樹齢400年といわれる椎や数々の木々が茂っていたそうです。家の教育方針で近隣の子供たちと遊ぶことは許されず、幼い頃から内省的で、絵に親しんだといいます。1926年に池上秀畝に入門して日本画を、その後、中村研一などに油彩画を学びますが、穏健な再現描写に飽き足らず、1933年にアヴァンギャルド洋画研究所へ。そこで抽象表現に触れ、コラージュなどによる作品を制作し、藤田嗣治などに認められました。1936年に二科会に入り、1937年に同会の前衛的作家たちによる九室会に参加しています。

戦中と戦後間もない時期は「戦争によって人間の極限状態を経験して、そのなかにいて大真面目で絵など描くのはおかしいような気がした」(註1)といい、制作から遠ざかっていますが1946年から活動を再開。1956年9月、フランスへ旅立ち、フランスで知り合った医師に誘われてアフリカ、バンバリ村を訪れます。想像もしなかった異文化の魅力に引き込まれながら、桂は、バンバリには、何かに心を動かされたことを物やことばで表現する術、伝達していくことで生まれる文化への最も基礎的な術がないという絶望感のようなものを感じたといいます(註2)。

アフリカ滞在を終え、今度は機械文明の最も発達したアメリカ、ニューヨークへ。アメリカで活躍していた日本人画家たちと交遊する一方、アンフォルメル、抽象表現主義、ポップアートなど新しい動きを見て歩き、拝金主義、物質主義などについても考えたといいます。これらの海外体験は、桂に文明や文化とは何か、それらの中で自分の中に流れ込んでいるものは何かという問題に手ごたえを与えてくれたようで、帰国後は、以前にも増して自由な表現に挑んでいます。

「やぶれ凧」が制作された1966年、桂は現代日本美術展で最優秀賞を受賞しています。このころ、民話などを主題とし、日本文化の中に世代を超えて受け継がれてきた記憶を呼び覚ます一方で、現代社会への鋭い視点を提示する作品を多作しています。「やぶれ凧」もその一点。ベニヤ板に和紙を張り付けた独特の風合いの白地に褐色、朱色など色数を限って独特の風合いをつくっています。ユーモアや遊びが感じられるのは、「作者の真意だけが出てきては興ざめです」と語り、直截に自己の内面を表現するのを粋とせず、「トボける」のを制作の姿勢のひとつとしたこの作家の持ち味でしょう(註3)。画中の凧の左下には「頭痛」の文字。このころの日本は、1964年の東京オリンピックを終え、1970年の大阪万博に向かっていました。ちなみに万博候補地には千葉も上がっていたそうです。「もはや戦後ではない」と言われて10年、国際化に向けた祝祭的行事の一方で、安保闘争、1968年からの学生運動など多くの社会問題をかかえる時期でもありました。風を受けてもうまく揚がれないやぶれ凧は、そうした世相そのもののようです。

［館長 山梨絵美子］

註 1「インタヴュー 桂ゆきの40年」『みづゑ』893号1979年8月
2「アフリカの原野」読売新聞 1963年4月7日
3「作家の発言 桂ユキ子」『みづゑ』738号 1966年8月

福田美蘭展

Fukuda Miran

千葉市美コレクション遊覧

Viewing the Collection of Chiba City Museum of Art

作家・福田美蘭さんインタビュー

10月2日より企画展「福田美蘭展　千葉市美コレクション遊覧」が開幕します。開催にあたって、作家の福田美蘭さんに、貴重なインタビューの機会をいただきました。［話し手：美術作家　福田美蘭／取材日：2021年8月18日］

——大規模な個展は、2013年に東京都美術館で開催された「福田美蘭展」以来となります。いまの心境をお聞かせください。

東京都美術館の展覧会では、日本美術と西洋美術のセクションを分けて展示したのですが、西洋美術のほうに比重が置かれていました。日本美術についてもっと考えてみたいと感じ、しばらくは日本美術に焦点を絞って制作しようと思っていたんです。そのなかで、ちょうどお話をいただき、2013年以降の方向性を示す個展にしようと考えました。ですから、回顧展ではなくて、日本美術と新たに向き合った軌跡を見せるような内容になっています。

——当時は、西洋美術に興味関心があったということでしょうか。

そうですね。美術を好きになるきっかけが、西洋美術でしたから。受験や大学で学ぶので、自然なことだったと思います。けれど、制作を続けていくうちに、西洋美術は近しく感じる一方、日本美術は、自分の国の作品にもかかわらず、遠く感じると気づいていました。それがこれからの課題だと実感したのが、2013年の個展で作品を並べてみたときでした。それまでは、描きたいものに追われて気がつかなかった。並べてみて、日本美術を考え直してみよう、と思ったんです。

——今回は、千葉市美術館の日本美術コレクションとのコラボレーションが繰り広げられます。コラボレーションする作品は、どのようにセレクトされましたか。

まずは、作品を見て、疑問が湧いたものや、もっと知りたいと思ったものを調べていきました。そうするうちに生まれた発想やイマジネーションを、「自分自身がかたちにして見てみたい」と思った作品を選んでいます。頭のなかのイメージを、かたちにして自分の目で見る。それが、ひとつの動機でしたね。

——千葉市美術館の目玉といえる作品が多く選ばれています。

刊行されている2冊の所蔵品カタログから、基本的には選びました。というのも、このカタログには、広く認められた重要な作品が揃っています。「みんなが知っている作品を選ぶ」ということは、わたしの制作のなかで、とても大事なことです。みんなが知っている作品に新たな見方を提示することで、それぞれが持っている固定観念に揺さぶりをかけることができますから。

　たとえば、「赤富士」（冨嶽三十六景　凱風快晴）は、みんな知っている。けれど、知っているがゆえに、そこで思考が止まってしまう。それを切り崩して、ゼロからオリジナル作品を見るための、わたしの作品であってほしい（図1）。わたしの作品を見て、もう一度オリジナル作品に戻ったときに、いままでとは違う見方が拡がる。わたしの作品は、オリジナル作品を見るためのフィルターでありたい。そういうイメージなんです。

【図1】　福田美蘭　《冨嶽三十六景　凱風快晴》　2021年

——コレクションを、こういったかたちで紹介する機会をいただけて、美術館としても大変嬉しいです。

このコラボレーションが実現したのは、「千葉市美術館だから」というところがとても大きいです。歴代の館長や学芸員が気持ちを込めて収集した作品群は、ただのコレクションとは違います。これまでも、千葉市美術館の学芸員のみなさんが書かれた文章を読んでいましたし、日本美術のことを調べれば歴代の館長が出てきますし、とても心強かった。コレクションそのものも、日本美術独特の楽しさがあるものばかりです。ですから、過去の美術を理解する面白さで、こちらのイマジネーションも力強く湧いてきて、特別に親近感のあるコラボレーションになりましたね。

——今回は、16点もの新作が出品されます。とくに、思い入れのある作品はありますか。

一点挙げるとすれば、《坐鋪八景　台子夜雨》（図2）です。千葉市美術館には、鈴木春信の《坐鋪八景　台子夜雨》の初版と第二版が所蔵されています（図3）。田辺さん＊の論文を読み、この2点が、錦絵の誕生において極めて重要な作品であることを知りました。第二版は、商品として出版するために、より色鮮やかな摺りになっているんですね。

　わたしの作品では、複製版画の一部を朱色に塗りつぶしています。江戸時代の人々は、伝染病や感染症の流行を恐れて、疫病除けの効果があると信じられていた「赤いもの」を身につけていたそうです。それにちなみに、新型コロナウイルス感染症が収まるよう、願いを込めました。第二版も、わたしの作品も、その時代の状況によって生まれたものです。制作のなかで、時代の要請による作品の変化を、追体験することができた。そういう作品なんです。

＊千葉市美術館副館長兼学芸課長・田辺昌子。「福田美蘭展」担当学芸員。

——時事的な問題を取り上げた作品もあります。こういった作品を制作する際は、どのようなことを念頭に置いていますか。

まず、扱いは慎重に行います。その作品を制作すべきか、検討を重ねます。そして、作るとなった場合、「なぜわたしはこの作品を作る必要があるのか」など、言葉で説明できるくらい、明快に作品意図を固めます。また、自分以外の人にはどのように作品が見えるのか、客観的な見え方とリスクを考えます。

　もうひとつ、大事だと思っていることがあります。それは、時事的な問題に対して、自分の考えを作品で表すことはあっても、それを振りかざしたり、押し付けたりしないこと。「美術で社会を変えよう」「美術で社会に貢献しよう」というような、世の中に力を及ぼそうとして作る作品と、わたしの作品はまったく違います。そのことを、はっきりとわかってもらわなければならないと思っています。

——新型コロナウイルス感染症の流行によって、制作に影響はあったのでしょうか。

【図2】福田美蘭《坐鋪八景 台子夜雨》 2021年

初版判

第二版判

第二版判

第二版判

【図3】鈴木春信《坐鋪八景 台子夜雨》

初版　明和3年（1766）

第二版　明和3-4年（1766-67）頃

コロナの蔓延とオリンピックの強行は、非常に特殊な状況ですよね。このような状況のなか、これらとまったく無関係な作品を作ることは、不自然だと思いました。なぜなら、わたしは、自分の足もとから立ち上がってくる問題を掘り下げることで、同時代の人たちとその問題を共有できると思っているからです。コロナもオリンピックも、非常に身近な問題です。それが作品に入り込んでくることは、自然なことだと思い、制作を進めました（図4）。

【図4】福田美蘭《二代目市川団十郎の虎退治》2020年

——現在は、新作のうち、最後の作品に取り組んでいるとお聞きしました。

描いたものをすぐに発表できる機会は、なかなかないことです。今年起こったできごとを作品にして、今年のうちに見てもらう。その意味でも、コロナやオリンピックを題材にした新作は、ぜひともいま見てもらいたい、と思っています。時間が経って、この状況を忘れていったり、感覚が変わっていったりしないうちに、いまのわたしたちが、これらのできごとをどう捉えるか、共有したいと考えています。

——日本美術、現代美術、どちらが好きな人にも見ていただきたい、非常に充実した展覧会になりそうです。

現代美術は、歴史、人物、社会、科学、宗教など、あらゆるものを包み込んで語ることができます。この世界がどうなっているのかを知り、よりよく生きるためにひらかれた美術だと思っています。だから、本来は、すごく楽しくてわくわくするものであってほしいんです。それが少しでも伝わったら、という気持ちで、この個展を準備しました。

福田美蘭展
千葉市美コレクション遊覧

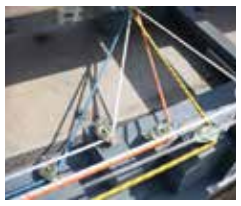
会　期　2021年10月2日［土］
　　　　〜 12月19日［日］
会　場　8・7階 企画展示室
休室日　10月4日、11日、11月1日、15日、
　　　　12月6日（すべて月曜日）
詳細はホームページよりご覧ください

2021年7月14日〜10月3日
「つくりかけラボ04　飯川雄大｜デコレータークラブ –0人もしくは1人以上の観客に向けて」レポート

「デコレータークラブ」はどこにいる？

「デコレータークラブ –0人もしくは1人以上の観客に向けて」は、10月3日までの開催。前号のアーティストインタビューでは、「観客とインスタレーション作品をめぐる循環を作りたい」とお聞きしました。それでは、実際にどのような循環が生まれたのでしょうか。美術館全体にまで広がった、展示のようすをご紹介します。

［撮影：飯川雄大、千葉市美術館　イラスト：飯川雄大］



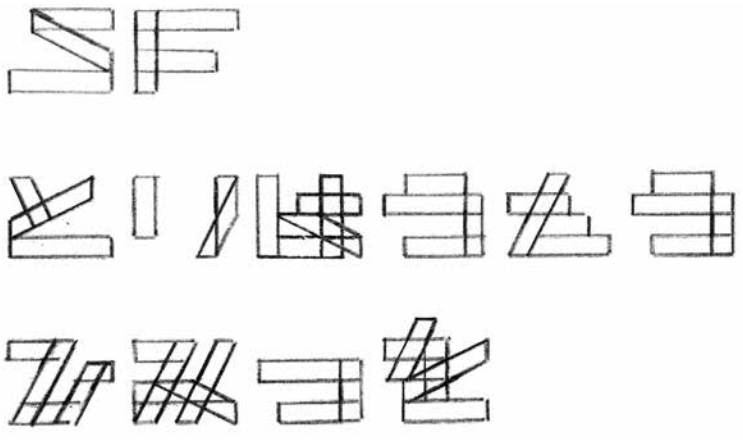
タイトルにある「デコレータークラブ」とは、海藻や小石を身につけて姿を変えるカニのこと（clubではなくcrabなのです）。飯川さんは、このカニの名前をタイトルに用い、観客の気づきや反応を誘うさまざまなプロジェクトを行っています。

つくりかけラボ04　飯川雄大｜デコレータークラブ – 0人もしくは1人以上の観客に向けて
会　期　2021年7月14日（水）〜10月3日（日）
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

＼次回予告／

2021年10月16日〜12月26日

つくりかけラボ05　松本力｜SF とりはうたう ひみつを



次回のつくりかけラボは、絵かき、映像・アニメーション作家の松本力さんをお招きします。
開催に先立って、タイトルに込めた想いと、特徴的なロゴマークについて、コメントをお寄せいただきました。

つくりかけラボ05　松本力｜SF とりはうたう ひみつを
会　期　2021年10月16日（土）〜12月26日（日）
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

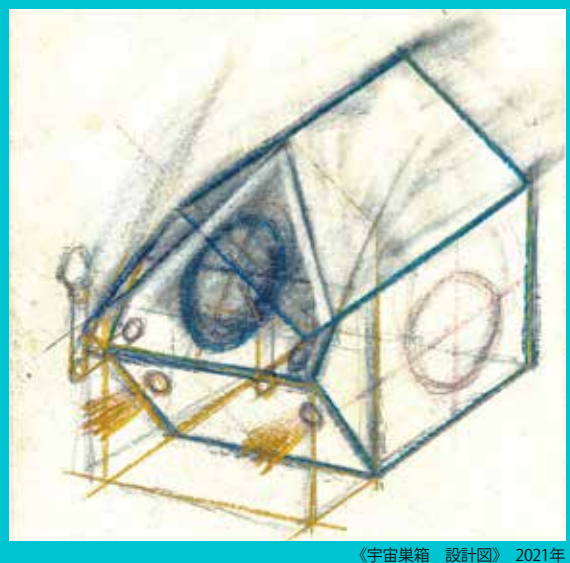
家のベランダで、スズメたちがごはんを食べたり水浴びしたりしていたけど、この数年あまりみかけなくなりました。でも、早朝、落葉をはいていると、きまって一羽のスズメが飛んできます。なんだか、もう友だちみたい。ある日、帰ってきたら、一羽の子スズメが路で冷たくなっていました。巣から落ちてしまったのか。

そういえば、ぱっと視界にスズメが飛込んでくると、おもわずしらずうれしくなります。スズメも人間もどこでどうしているのか。お互いに知らないうちに、なにをみておもって、すごしているのか、話しているような気分になります。鳥がいろんな土地に飛んでいくように、人もどこかにいって帰ってきて、物語るとき、そこに小さくて大きな真実味があることを再発見したい。

このロゴマークは、SFをテーマに、積み木のようなかたちで、人と鳥が共生する町並みと、お互いの孤独な関係性の集合を、なんとなく象徴しています。

この世界で、なにを、どこから、どのようにみているか。鳥たちとまなざしを交しあう、空想科学の視点と、時間の後先を飛びこえるようなアニメーションで、彼らがうたう、少し不思議な世界の秘密を想像します。

［松本力］



《宇宙巣箱　設計図》 2021年

C'n scene news

祝！C'n 100号
バックナンバー・ギャラリー

1997年から始まった千葉市美術館ニュース「C'n(シーン)」は、 今号で100号を迎えました。100 号を記念して、これまでの C'n の表紙を大公開します！これからも C'n をどうぞよろしくお願いします。

▶ウェブでぜんぶ読めます！

千葉市美術館のホームページでは、C'n のバックナンバーを公開しています。お好きな号を、お好きなときに、ぜひお読みください。